

兵庫・木梨きなし・北浦きたうら遺跡

- 1 所在地 兵庫県加東郡社町木梨
- 2 調査期間 一九九三年(平5)六月～一九九四年三月
- 3 発掘機関 加東郡教育委員会
- 4 調査担当者 森下大輔
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代後期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(北条)

木梨・北浦遺跡は、滝野社インターチェンジから中国自動車道沿いに東1kmのところに位置し、加古川の支流である三草川及び千鳥川の開析により形成された、標高六一mの低位段丘面から標高五九mの上中面と呼ばれている沖積平野に立地している。遺跡は東西五〇〇m、南北四〇〇mあまりに広がると考えられる。調査は県営圃場整備事業に起因するもので、遺跡の

保護が不可能であった排水路及び圃場面八〇〇〇m²が対象であった。調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居四三棟・溝七条・方形土坑六基、奈良～平安時代の掘立柱建物一三棟や土師器製作用の粘土採掘跡の土坑群、鎌倉時代以降の掘立柱建物八棟などが確認されている。また条里地割に沿った溝などもみられる。

出土遺物の総量は、整理用コンテナ八〇箱あまりで、須恵器・土師器が大半であるが、ヒノキ製の曲物・折敷・盤・下駄・櫛状木製品・棒状木製品をはじめ、松明に使用された木片や手斧による木屑が大量に出土している。また、粘土採掘跡の土坑から出土した土師器の甕にはすべて青海波文が認められるという特色が見られるほか、木簡出土層の上部からは東播北部古窯跡群のうち吉馬二〇号窯跡・鍋子一号窯跡などと同時期の山茶碗が出土するところから、これらの製作年代は一一世紀初頭頃と考えられ、東播北部古窯跡群の土器編年にも寄与したといえる。なお木簡は、幅三m、深さ〇・二mの北から南に延びる緩やかな旧河道状遺構から、墨書面を下にしてほぼ水平の状態で出土した。

遺跡の性格を示す遺物には、風字硯・稜碗・緑釉陶器・黒色土器・製塩土器や、「井」と記す墨書土器などの土器類のほか、木簡・馬形、机の脚と思われる獣足などの木製品が出土し、官衙的な様相を示している。当該地は古代の播磨国賀茂郡穂積郷にあたり、郷の役所に関わる遺跡の可能性が考えられる。

8 木簡の积文・内容

(1) 「以天禄三年八月十日奉読経之卷^{〔記カ〕} 右□上華□□□為奉莊嚴上界天衆下界

合六百二十一卷之中

仁王般若経五^{〔百カ〕}十卷

金剛般若経六十八卷

般若心経五卷

印仏

神□年中□^{〔神カ〕}天満天神各々眷族□所郡内大下
 □神□□中□□右□□□□□二聖霊□□□□

大品四天王□□卷

満万事所念於一身□

□□三□□救諸身

□内南□□□男女身不□□□□□

626×160×9 011

木簡は、ヒノキの板目材で、上端部中央の一カ所に、柱などに打ち付けるための釘穴が穿たれている。

内容は、上段は天禄三年（九七二）八月十日に仁王般若経五一〇卷・金剛般若経六八卷・般若心経五卷などを読誦した記録で、下段には願文を記す。この木簡は、寺院・僧侶が依頼を受けて読誦した経典名・巻数を報告する「巻数^{かんず}」にあたり、おそらくその現存最古の遺品とみられる。ただし願文が判読できないので、読経の目的や願主などは明らかでないが、中世以来、絵巻物にあらわれる「巻数板」（中野豊任『祝儀・吉書・呪符』）と関係する可能性がある。

また、読誦経典名とならんで「印仏」の語がみえることは、読誦と時を同じくして、功德を得るための印仏の作成もしくは密教修法

の「印仏作法」が行なわれたことを示しており、印仏について時期的にも地域的にも興味深い史料となるであろう（菊竹淳一『仏教版画』日本の美術二一八）。

一行目の「巻」の下の子は、墨痕からは「記」と読むことができそうであるが、木簡の内容から「数」である可能性も残る。大品四天王（経）の巻数は「廿」または「卅」、願文部分二行めの「神」の下の子は「弟」または「第」の可能性がある。

なお、六二二巻の経文を一日で読みあげることとは不可能であろうから、転読が行なわれていたことを裏付ける墨書資料としても最古のものである。

（森下大輔）

